

ある医療系大学1・2年生の性知識の実態とリプロダクティブヘルスケア

中越 利佳, 宇都宮 温子, 今村 朋子
森 久美子, 高田 律美

愛媛県立医療技術大学紀要 第8巻 第1号抜粋

2011年12月

ある医療系大学1・2年生の性知識の実態とリプロダクティブヘルスケア

中越 利佳*, 宇都宮 温子*, 今村 朋子*
森 久美子*, 高田 律美*

A Report on the Sexual Knowledge and Reproductive Health Care Needs Among First and Second Year Health Sciences University Students

Rika NAKAGOSHI*, Haruko UTSUNOMIYA*, Tomoko IMAMURA*,
Kumiko MORI*, Norimi TAKATA

Key Words : 性知識 性イメージ 性教育 リプロダクティブヘルスケアニーズ

序 文

20歳未満の人工妊娠中絶率は、2001年の人口千対13.0をピークに年々減少し、2009年の20歳未満の人工妊娠中絶率は、人口千対7.1までに達した¹⁾。また、10代の性感染症罹患率も感染症発生動向調査における定点あたりの報告数も減少傾向を示している²⁾。

しかし、19歳～24歳までの人工妊娠中絶率は¹⁾、19歳では人口千対12.7、20歳～24歳では人口千対15.1と高率となっている。また、平成20年度定点報告からみた性器クラミジア患者報告では²⁾、患者全体に対する20～24歳が占める割合は、男性が20.1%、女性は33.5%であり、20歳前半の感染者の割合が高くなっている。

年齢別の性交経験率は⁴⁾、高校卒業時の18歳の時点で男子約40%、女子約37%であるのに対し、大学入学後の19歳では男女ともに50%以上、大学卒業時の22歳では80%以上に達している。よって、性行動が活発化する高校卒業後から望まない妊娠や性感染症にかかるリスクが高まっているといえる。

高校卒業までは、本人の希望の有無にかかわらず、集団での性教育が実施される。学習指導要領に基づき、セクシャリティ（生殖のみならず社会・文化的な性としての観念）、妊娠、性感染症、避妊に関する内容が網羅されているが、高校卒業時点での性に関する知識や態度の学習到達度は明確化されておらず、また、性教育にかかる時間や内容も学校によって統一されていないのが現状である。本来ならば、高校を卒業した時点で、性に関する基本的な知識や避妊・性感染症予防を実行できる生活スキルを獲得し、性の自己決定能力を持ち、自律した性行動がとれることが望まれる。

一部の大学においては、新入学生を対象に、オリエンテーションの一環として、避妊と性感染症を中心とした性教育を実施し、高校までの性教育の内容を強化するところも多い。

筆者は、母性看護学対象論のリプロダクティブヘルスケアの単元で、性感染症、人工妊娠中絶、避妊法を担当している。学生の講義後の感想に、「知らないことが多かった。」「間違っ理解していた。」「もっと早く知りたかった。恥ずかしくて誰に相談してよいかわからなかった。」という内容が多く見られる。講義を通して学生は、医療職として性に関する専門知識を学びながらも、自分自身の問題として捉えているようであった。

本研究は、ある医療系大学1・2年生を対象に、性に関する知識の実態と、今まで受けてきた性教育の内容および性に対するイメージ、また、リプロダクティブヘルスに関して知りたい内容を明らかにし、講義および学生の性の健康に関する支援の在り方を検討することを目的として実施した。

方 法

1. 対 象

ある医療系大学1・2年生を調査対象とした。

2. 調査期間

平成23年5月20日～平成23年5月31日

3. 調査方法

本調査は、個人回答式の無記名自記式質問紙法を用いた。本研究の意図および意義を学生に説明、協力を依頼し、調査用紙を配布した。記載された調査用紙を個人用封筒に入れ厳封し、設置した鍵つき回収箱に投函する留

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

め置き法により回収した。

4. 調査内容

属性として、年齢、性別、学年、学科、婚姻の有無、先行調査で用いられた性知識（避妊と性感染症および子宮頸がん）に関する質問³⁾⁴⁾⁵⁾（19問）、「性」・「セックス」に関するイメージ³⁾（6項目の相反する形容詞対の9段階SD法で、肯定的にとらえているものから順に9点から1点を配す）、「性」イメージ形成に影響を与えたもの（9項目、2項目まで複数回答可）、今まで受けた性教育の内容で印象に残っているもの（13項目、複数回答可）、性に関することでこれから知りたい内容（13項目、2項目まで複数回答可）である。調査項目の内容は表1に記す。

5. 分析方法

性知識は正解：1点、不正解・わからない：0点として得点化し、正答率を算出し、学科別の学年比較を χ^2 検定、フィッシャーの直接法、残差分析にて検討した。

性イメージは、SD法により得点化し、Mann-Whitneyにより学科比較、学年比較を行った。性イメージ形成に影響を与えたもの、性教育で印象に残っている項目、性に関して知りたい内容については、学年ごとに単純集計を実施した。解析は統計ソフトSPSS Ver.15.0を使用した。

6. 倫理的配慮

調査対象者には、本調査への参加協力は自由意志であり、協力を断っても、不利益は生じないこと、回答は無記名であり、データはコンピューターを用いて統計的に処理し、個人が特定されないこと、調査の途中で中断してもよいこと、調査用紙の投函をもって参加同意が得られたこととする旨を口頭・文書にて説明した。調査用紙は、研究者の研究室にて保管し、論文作成後は、裁断破棄するとともに、PCデータは、消去する。なお本研究は、本学倫理委員会の承認（11-003）を得て実施した。

結 果

1. 回答者の概要

調査対象者164名に調査用紙を配布し、66名から回答が得られた（回収率40.2%）。対象者の内訳は、男子5名、女子61名であった。男子の回答数が少ないため、分析は女子61名を対象とした。

対象者の内訳は看護学科45名（1年生27名、2年生18名）、臨床検査学科16名（1年生8名、2年生8名）であった。年齢は18歳～20歳で、両学科の1年生の平均年齢は18.3歳、2年生の平均年齢は19.4歳であった。また、全員が未婚であった。

2. 性知識の正答率

避妊および性感染症、子宮頸がんの知識19項目の正答

率を学科別に図1・2に記す。看護学科は、2年生で1年生と比較し、有意に正答率が上昇した項目は、「5. オーラルセックスでは、性感染症はうつらない」、「6. 性感染症にかかっているにもかかわらず症状はでない」19. 日本の20代女性の子宮頸がん検診率は、欧米諸国と比較して高い」であった。

臨床検査学科では、2年生で有意に正答率が上昇した項目は、「2. 排卵はいつも月経中に起こる」、「4. 性感染症を治療しないと不妊症になる」、「16. 子宮頸がんの主な原因はHPVで性交渉により感染する」であった。

正答率が両学科1・2年生ともに40%以下の項目は、「3. 精液がたまりすぎると体に悪い影響がある（平均正答率32%）」であり、臨床検査学科では「14. 性感染症は口から性器に感染する（平均正答率19%）」も低率を示した。

3. 「性」イメージ

「性」・「セックス」といった言葉からイメージする内容について、6項目の形容詞対から9段階SD法にて得点化し、学年別、学科別に比較した結果を表2、表3に記す。学科による性イメージ得点に有意差は認められなかった。また、両学科ともに「軽いー重い」が6点以上を示していた。一方、「きれいーきたない」、「恥ずかしいー恥ずかしくない」が4.5点以下を示している。学年比較では、「明るいー暗い」、「良いー悪い」において、2年生が1年生と比較して有意に高い得点を示した。

4. 性イメージの形成に影響したもの

性イメージの形成に影響を与えた内容について、各項目の人数と各項目の学年比率を図3に記す。対象者全体では、学校性教育、友人・先輩、インターネット、雑誌の順に多かった。

各項目の学年比率では、学校性教育、両親、友人・先輩は、ほぼ同率を示したのに対し、教師、インターネット、雑誌、TV・ビデオの割合は1年生が高く、交際経験、その他（サークル活動）は、2年生の割合が高かった。

5. 今までに受けた性教育で印象に残っている内容

性教育で印象に残っている内容の割合を図4に記す。性感染症18%、月経と射精、妊娠が13%の順に上位を占め、次いで人工妊娠中絶、避妊の順に高かった。

6. 性について知りたい内容

性について知りたい内容については、学年別に図5・図6に記す。

1年生では、妊娠と出産18%、子宮頸がんの治療と予防15%、具体的な避妊法12%、交際相手との人間関係の作り方10%の順で高い割合を示した。2年生では、子宮頸がんの治療と予防26%、性感染症の治療と予防19%、月経困難14%、妊娠と出産12%の順で高い割合を示した。

表1 調査項目の内容

要因	項目	
属性	年齢	
	性別	1. 男子 2. 女子
	学年	1. 1年生 2. 2年生
	学科	1. 看護 2. 臨床検査
	結婚の有無	1. 未婚 2. 既婚
性知識 *	1. 膣外射精は確実な避妊法である	
	2. 排卵はいつも月経中に起こる	
	3. 精液がたまりすぎると体に悪い影響がある	
	4. 性感染症を治療しないと不妊症になる	
	5. オーラルセックスでは、性感染症はうつらない	
	6. 性感染症にかかっているにもかかわらず症状は出ない	
	7. 性感染症にかかっているとエイズウイルスに感染しやすい	
	8. ピルでは、エイズウイルスや性感染症を予防できない	
	9. HIV感染後数日では感染の有無はわからない	
	10. 治療薬の進歩でエイズの発病を遅らせることができる	
	11. プールや風呂でHIVは感染しない	
	12. 食器の共用でHIVは感染しない	
	13. クラミジアは性行為で感染する	
	14. 性感染症は口から性器に感染する	
	15. 保健所では無料匿名でHIV検査ができる	
	16. 子宮頸がんの主な原因はHPVで、性交渉により感染する	
	17. 子宮頸がんは20代の女性で急増している	
	18. 子宮頸がんは、ワクチンを接種することで100%予防できる	
	19. 日本の20代女性の子宮頸がん検診率は、欧米諸国と比較して高い	
「性」「セックス」イメージ **	明るい—暗い 楽しい—楽しくない きれい—きたない	良い—悪い 重い—軽い 恥ずかしくない—恥ずかしい
性イメージ形成に影響したものの ****	1. 学校・保健所などの性教育 2. 両親 3. 友人・先輩 4. 教師 5. インターネット、携帯サイト	6. 雑誌、マンガ、コミック 7. TV、ビデオ 8. 交際経験 9. その他
今までに受けた性教育で印象に残っている内容 ***	1. 男女の身体のしくみ、月経と射精 2. 生命尊重 3. 異性の人格尊重 4. 異性の心理、異性との付き合い方 5. 性感染症 6. 性被害 7. 妊娠	8. 人工妊娠中絶 9. 子宮頸がん 10. 避妊の意味 11. 避妊法の実際 12. その他 13. 覚えていない
性に関して知りたい内容 ****	1. 具体的な避妊法 2. 妊娠・出産 3. 性感染症 4. 人工妊娠中絶 5. HIVとAIDS 6. 避妊または性交渉について話し合える人間関係作り 7. 子宮頸がん	8. 性に関する相談機関 9. 性に関する情報 10. DV, 性被害 11. 月経困難 12. その他 13. 特にない

* ○：正しい ×：間違っている △：わからない

正解を1点、不正解・わからないを0点として得点化

** 9段階SD法、肯定的にとらえている方から順に9点～1点を配し得点化

*** 複数回答

**** 二つまで複数回答可

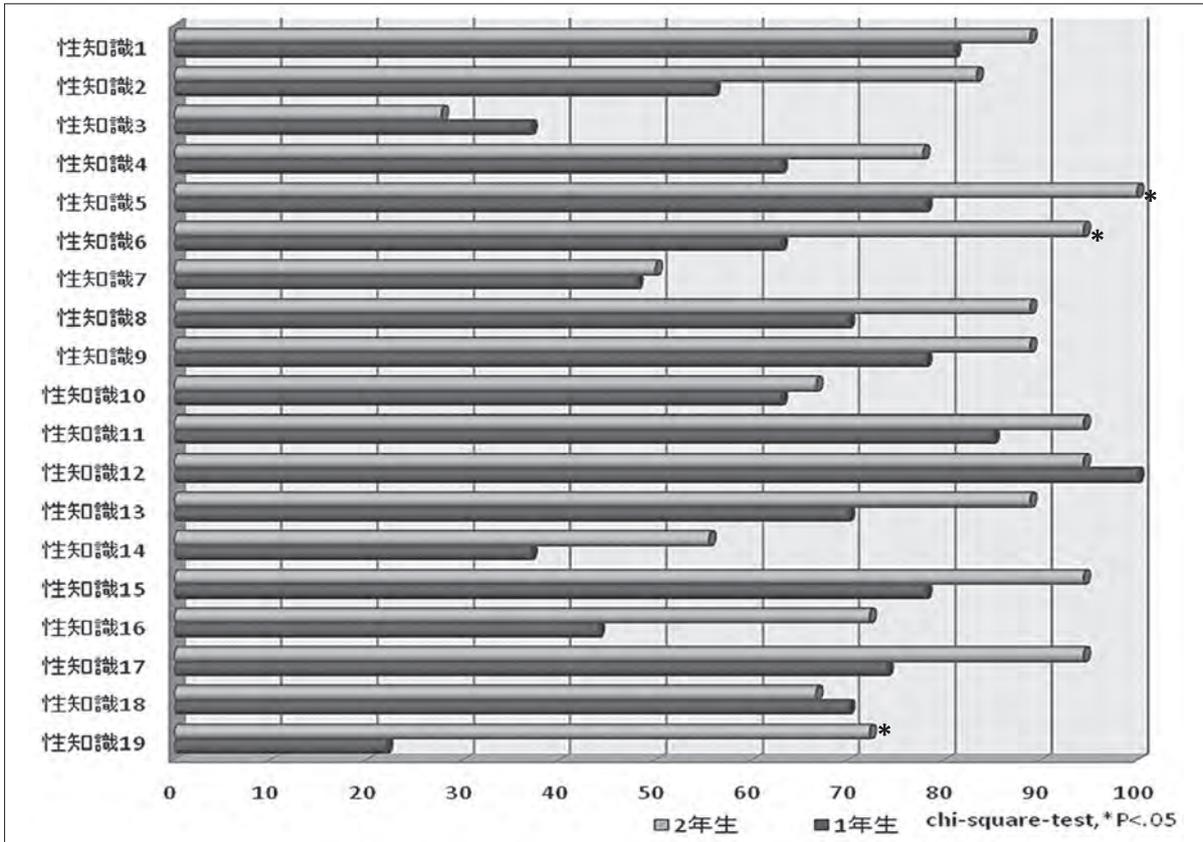


図1 看護学科 性知識正答率 (%)

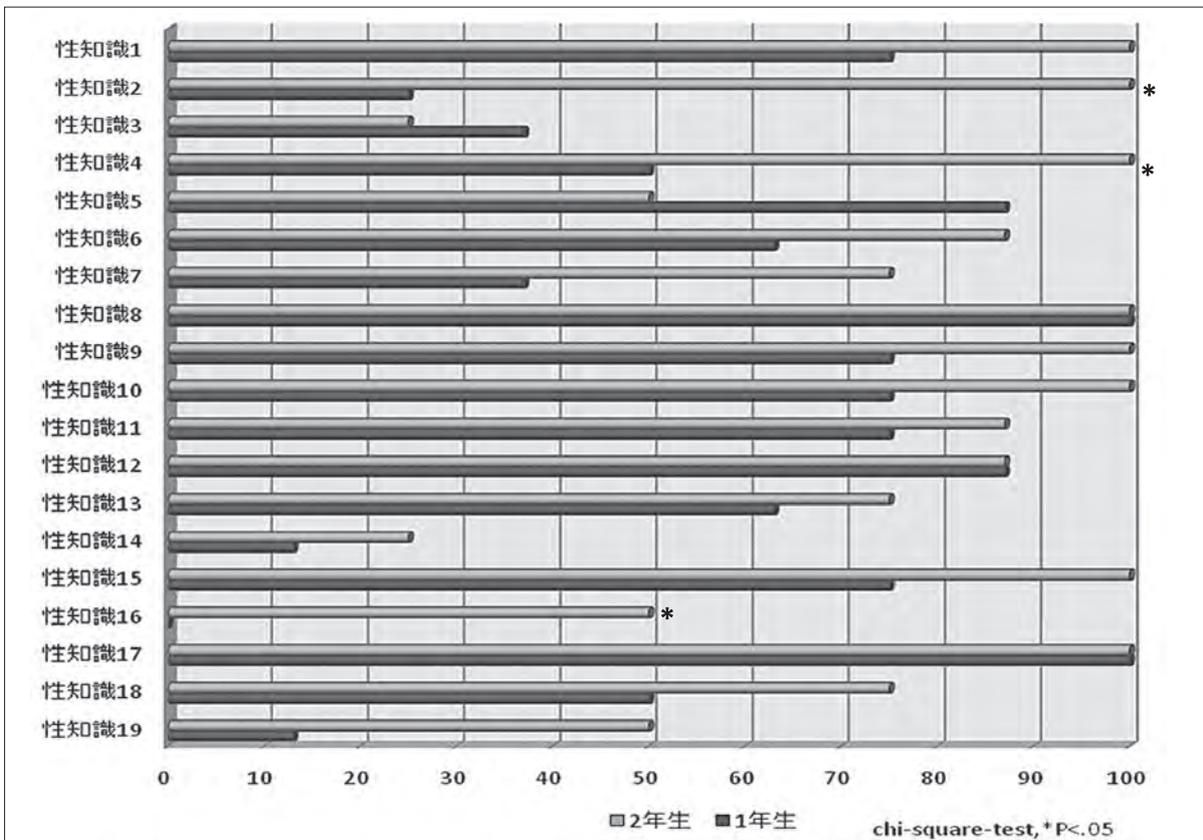


図2 臨床検査学科 性知識正答率 (%)

表2 学科別性イメージ得点

	学科	平均値	標準偏差	Z値
明るいー暗い	看護	5.23	1.78	-1.38
	臨床	4.63	1.20	
楽しいー楽しくない	看護	4.84	1.60	-0.77
	臨床	4.44	1.41	
きれいーきたない	看護	4.37	1.48	-1.11
	臨床	3.81	1.56	
良いー悪い	看護	5.33	1.66	-0.75
	臨床	4.88	1.63	
軽いー重い	看護	6.12	1.68	-0.73
	臨床	6.44	1.63	
恥ずかしいー 恥ずかしくない	看護	4.14	2.23	-0.36
	臨床	4.31	2.12	

Mann-Whitney ns

表3 学年別性イメージ得点

	学年	平均値	標準偏差	Z値
明るいー暗い	1年	4.68	1.27	-1.94 *
	2年	5.60	1.98	
楽しいー楽しくない	1年	4.71	1.51	-0.44
	2年	4.76	1.64	
きれいーきたない	1年	4.18	1.49	-0.14
	2年	4.28	1.57	
良いー悪い	1年	4.88	1.61	-1.99 *
	2年	5.64	1.63	
軽いー重い	1年	6.09	1.75	-0.73
	2年	6.36	1.55	
恥ずかしいー 恥ずかしくない	1年	3.91	1.86	-0.85
	2年	4.56	2.55	

Mann-Whitney * p < .05

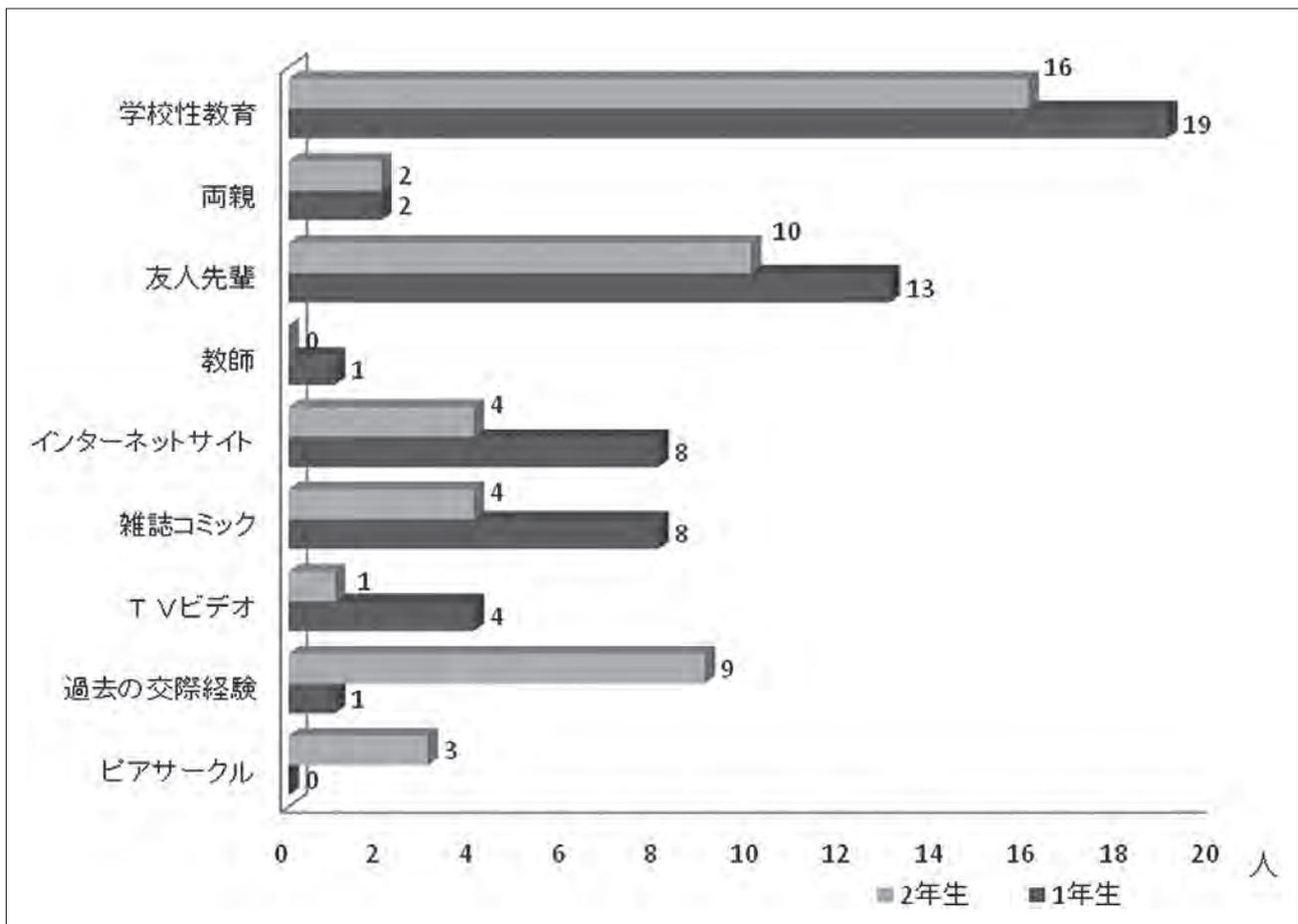


図3 性イメージ形成に影響したもの

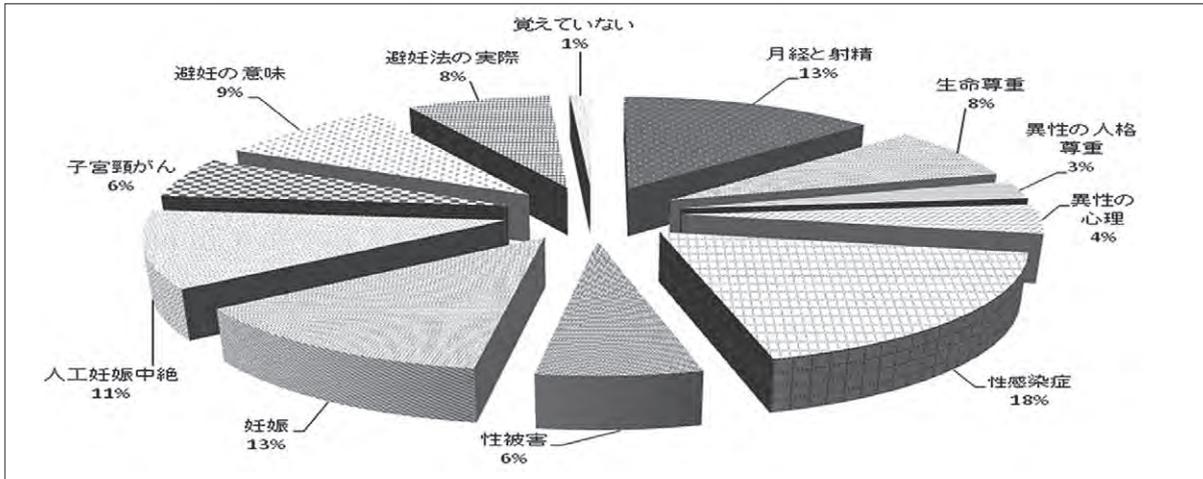


図4 今まで受けた性教育で印象に残っている内容 (n=187)

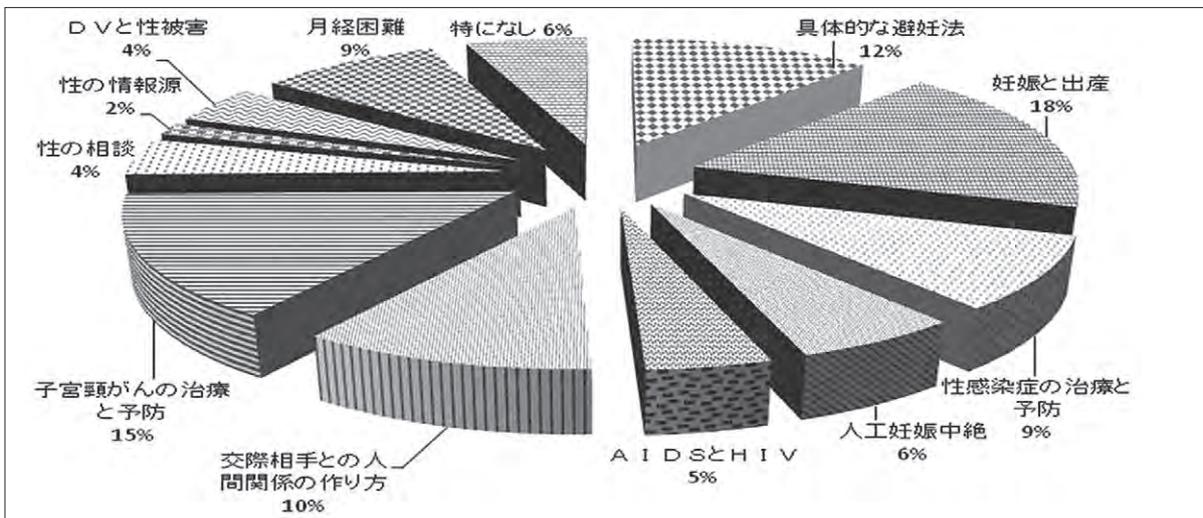


図5 性に関して知りたい内容 (1年生 n=67)

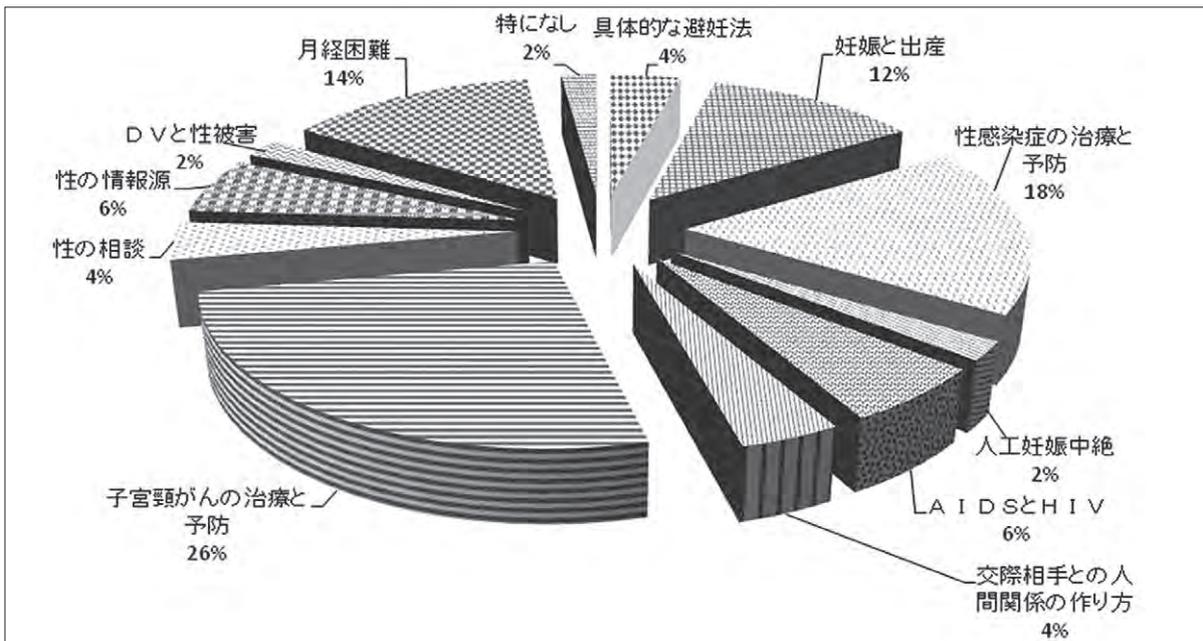


図6 性に関して知りたい内容 (2年生 n=50)

考 察

1. 性知識の実態

基礎的な避妊と性感染症に関する問題（知識1～知識6）において、調査対象学生の性知識の正答率を、2005年に実施された大学生を対象とした先行調査⁶⁾と比較してみた。全国平均正答率と比較し、2年生の正答率は上回っていたが、1年生では、「1. 膣外射精は、確実な避妊法である」、「2. 排卵はいつも月経中に起こる」、「4. 性感染症を治療しないと不妊症になる」、「6. 性感染症にかかっているにもかかわらず症状はでない」の項目で、全国平均正答率を下回っていた。

また、筆者が昨年高校3年生を対象とした調査⁷⁾と1年生との正答率を比較したところ、知識1～6の全てにおいて、高校生とほぼ同率か、それよりも低い正答率を示しており、基礎的な避妊と性感染症に関する知識は、高校3年生以降、新たに獲得していないことが推察された。本調査は入学後約2カ月を経過して行われたものであるが、この時期の1年生の性知識は不十分であると考え対応していく必要がある。

2年生は専門基礎科目、専門科目の進行により、基本的な性に関する基礎的知識を再確認することにつながり、正答率が80～100%を維持できたと考える。しかしながら、「3. 精液がたまりすぎると体に悪い影響がある」に関しては、臨床検査学科25%、看護学科29%と正答率が低く、男性の性のメカニズムについて理解が不十分であることが明らかになった。また、看護学科2年生では、「4. 性感染症を治療しないと不妊症になる」が76%と低く、講義において、射精のメカニズムや性感染症と妊娠について内容を強化していきたい。

性知識7～15は、主にクラミジア感染、HIV、AIDSに関する内容である。1年生と比較し、2年生の正答率が高いのは、教養科目、専門基礎科目、専門科目の学習において、性感染症に関連する内容に触れる機会が増えることが関係していると考えられた。

1年生の性知識は、木原らの先行研究⁴⁾および筆者の先行調査⁷⁾での高校生の正答率とほぼ同じ結果を示しており、高校3年生の知識レベルと同程度であることが示された。性知識11.12など、HIVが日常生活において移らないという古典的な知識は正答率が高いのに対し、「14. 性感染症は口から性器に感染する」の正答率が低く、感染経路や性感染症とHIVの関係性、また、HIV検査や治療に関しての知識は不十分であることが示された。以上のことから、1年生の早期にこれらの知識を再確認し、性感染症は、性交渉において、誰にでも起こり得るリスクがあることを理解し、自分自身のこととして考えられるような働きかけが重要である。また、2年生も同様に感染経路の理解が不十分であり、間違った知識からリスクを背負う

ことがないように、講義では強調していきたい。

性知識16～19は、子宮頸がんに関する内容である。子宮頸がんに関しては、CMなど啓発活動が盛んに行われるようになってきた。梅澤の調査⁵⁾と比較しても、対象学生の子宮頸がんに関する知識は高く、とりわけ2年生の正答率が高いことから、子宮頸がんへの意識が高いことが推察できる。しかしながら、「16. 子宮頸がんの原因はHPVで、性交渉により感染する」、「19. 日本の20代女性の子宮頸がん検診率は、欧米諸国と比較して高い」などの知識が不十分であることが示された。20歳代の子宮頸がんの発症が増加し、学生自身もがん好発年齢に達していることを認識し、自分自身の問題として捉え、検診行動に結び付けられるよう働きかけていきたい。

2. 性イメージと性イメージ形成に影響するもの

本調査で使用した性イメージに関する質問は、個人の性に対する考え方や感じ方などセクシャリティを因る指標として用いられる。看護学科と臨床検査学科でのイメージ得点に有意差は認められず、専攻分野の違いが性イメージに影響していないことが明らかになった。また、学年比較では、1年生と比較し2年生は、性に対して、「明るさ」や「きれいさ」が有意に高く、性をより肯定的に捉えていることが示された。

しかし、全体的にみると性に対するイメージは否定的で、「きたない」、「恥ずかしい」と感じる学生が多く、また、性を「重い」と受け止め、性に関して、慎重な姿勢を示していることが推察できる。北村の男女の生活と意識に関する調査⁸⁾からも、セックスすることに関心がない、嫌悪していると答えた者は、16～19歳で男性36.1%、女性58.5%、20～24歳で男性21.5%、女性35.0%と高い割合にみられ、若い世代の性イメージの低下、性への抑圧を裏付ける結果となっている。

性イメージ形成に影響したものでは、学校での性教育をあげるものが最も多かった。石川は⁹⁾、教師や学校での性教育から主な性情報を得た者、特に中学・高校生の時期には、実際の性行動に際して抑圧的な働きをする可能性を指摘している。性イメージが否定的、抑圧的であり、その傾向が1年生に認められるのは、高校卒業後わずか2カ月を経過したばかりの時期であり、高校までの性教育をまじめに受けてきた学生の特徴ではないかと推察する。

しかし、2年生では交際経験やサークル活動が性イメージ形成に影響したとする割合が高くなっている。草野は¹⁰⁾豊かなセクシャリティを持つ者ほど、相手との関係づくりやコミュニケーション能力に優れており、また実際に性的な対人関係を体験することによって、性交渉に関するリスクへの対処行動意識を高めるとしている。また、北村は¹¹⁾人間関係の構築能力やコミュニケーション能力の低下は、現代の若者のセックス離れや性の抑圧に影響していると指摘する。2年生の性イメージが1年

生と比較して高いのは、大学入学後に、交際経験を通して相手との関係づくりや豊かなセクシャリティを育んできたものと推察する。したがって、2年生には性行動に伴うリスクに対して、具体的な避妊法や性感染症予防行動がとれるように支援していく必要があると考える。

3. これまで受けてきた性教育の内容と今後知りたい性に関する内容について

これまで受けてきた性教育の内容で印象に残っている内容は、性感染症、妊娠、月経と射精、避妊など、岡部らの先行研究¹²⁾とほぼ同様な結果となり、高校までの性教育の大半は、性感染症と望まない妊娠が主流となっていることが予測される。

これから知りたい内容については、1年生では、妊娠と出産、子宮頸がん、具体的な避妊法、交際相手との人間関係の作り方が上位を占めている。これは、大学生になり性行動が活発化する時期であり、これまでの教育で具体的に教えられていなかった避妊法や、性交や避妊について話し合える人間関係の作り方に関心を持っていることが推察できる。

また、2年生では子宮頸がんや性感染症、月経困難などの情報を得たいと思っており、性行動に関連する健康問題に関心が高く、自分自身のこととして捉えていることが推察された。

以上のことから、1年生には性の自己決定能力を育み、交際相手との人間関係の築き方や避妊法など具体的な生活行動スキルの獲得を支援していくことが重要と考える。そのためには、入学後早期に、高校までの性教育を補完する講義や演習を組み入れるなどの工夫が必要であると考える。また、2年生には性行動の活発化によっておこるリスクを理解し、そのリスクを回避するための具体的な行動がとれるように支援していくこと、性に関する悩みや不安にいつでも対応できる支援体制作りが必要であると考える。

引用文献

- 1) 厚生労働省衛生行政報告 (11/09/25) :母体保護関係, 人工妊娠中絶件数および実施率の年次推移
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/nw/eisei/09/dl/kekka5.pdf>
- 2) 厚生労働省感染症発生動向調査 (11/09/25) :年齢 (5歳階級) 別にみた性感染症 (STD) 報告数の年次推移
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tpo411-1.html>
- 3) 日本性教育協会編 (2007) :「若者の性」白書—第6回青少年の性行動調査報告. 51, 小学館
- 4) 木原雅子 (2008) :10代の性行動と日本社会—そしてWYSH教育の視点. 33, ミネルヴァ書房

- 5) 梅澤敬 (2011) :我が国における若年女性の子宮頸がんに対する意識に関する研究. 11, 人間総合科学大学大学院修士論文
- 6) 日本性教育協会編 (2007) :「若者の性」白書—第6回青少年の性行動調査報告. 219, 小学館
- 7) 中越利佳, 草薙康城, 宇都宮温子他 (2010) :高校生性の知識と性情報についての調査報告. 愛媛県立医療技術大学紀要, 第7巻第1号, 37-44
- 8) 北村邦夫 (2011) (11/09/25) :厚生労働科学研究費補助金「第5回男女の生活と意識に関する調査」
<http://nk.jiho.jp/servlet/nk/release/pdf/1226502324050>
- 9) 石川由香里 (2007) :情報源の違いがもたらす性意識のジェンダー差. 「若者の性」白書. 82-100, 小学館
- 10) 草野いづみ (2006) :大学生の性的自己意識, 性的リスク対処意識と性交経験との関係. 青年心理学研究, 18, 41-50
- 11) 北村邦夫 (2011) :セックス嫌いな若者たち. 171-180, メディアファクトリー
- 12) 岡部恵子, 佐鹿孝子, 大森智美他 (2009) :大学生の認識をもとにした高等学校における性教育の現状と課題 (第1報). 母性衛生第50巻2号, 343-351

要 旨

本研究の目的は、ある医療系大学1・2年生を対象に、性知識の獲得状況およびこれまで受けた性教育内容と性イメージとの関連性、リプロダクティブヘルスに関するニーズを把握し、学生支援のあり方を検討するものである。

1年生の性知識は、2年生と比較して有意に低いこと、特に性感染症と子宮頸がんの知識に有意差が認められた。また、射精のメカニズムや性感染症の感染経路の理解が両学年共に不十分であり、知識の定着を図る必要性が示された。

これまでを受けてきた性教育は、性感染症、月経・射精と妊娠、避妊に関する内容が主流であり、学校で受けた性教育が、学生の性イメージの形成に影響を与えていた。性イメージは全体的に否定的で抑圧的であり、1年生にその傾向が認められた。

1年生は、交際相手との人間関係の築き方、具体的な避妊法、2年生は、子宮頸がんや性感染症について知りたいとする者が多く、性に関する支援体制を整備する必要性が示された。

謝 辞

本調査にご協力いただきました学生の皆様に深く感謝いたします。